

研究科内公募プロジェクト

言語力を育成する学習活動の検討

—中学校教科書(5教科)の分析を通して—

代表 濱田 秀行(教育内容開発コース D2)

石橋 優美(教育内容開発コース D2)

磯崎 尚子(教育内容開発コース D1)

小田切 歩(教育内容開発コース M2)

駒 直樹(教育内容開発コース M2)

増井 孝則(教育内容開発コース M2)

指導教員 秋田喜代美(教育心理学コース 教授)

問題と目的

知識基盤社会の時代における学校教育には、子どもが自らの目標を達成し、自らの知識と可能性を発達させ、効果的に社会に参加することのできる力を育成することが求められている。

この目的を達成するために、教室という社会的な場において、子どもが、教科の内容を利用し、協働で課題を解決する過程に、言語を理解し、利用し、熟考しながら能動的に参加することで自らの知識・技能を高めることのできる授業が求められている。そのための1つの手だてとして、教科書の積極的な活用が提案されている。教科の学習における教科書の活用は、子どもによる教科書テキストについての読解の過程の充実として捉えることができる。

読解の過程は、認知的な処理の側面から、「情報の取り出し」、「解釈(直接的推測)」、「解釈の統合」、「熟考・評価」に区分できる。子どもが授業において教科書を活用しながら課題を解決する協働過程を重視する立場からは、テキストについて読み手が能動的に意味を構成する読解プロセスである「解釈の統合」や「熟考・評価」にかかわる学習活動が重要視される。

教科書の記述の在り方が、それを使用して行わ

れる授業の教室談話や子どもの思考のスタイルに反映されることが先行研究において明らかにされている。そこで、本研究では、新しいカリキュラムの在り方を探究する1つの手だてとして、教科書テキスト中の言語活動を促す記述の在り方について検討し、「解釈の統合」や「熟考・評価」にかかわる言語活動が、中学校課程の現状のカリキュラムにどのように用意されているかについて明らかにする。

具体的には、各教科の教科書について、次の3つの観点で分析し考察を加えた。①として、各教科における言語活動の全般的な傾向を捉えるため、読解の各側面にかかわる言語活動を促す記述について検討した。②として、各教科書において「解釈の統合」や「熟考・評価」にかかわる言語活動がどのように用意されているかを明らかにするため、各出版社による差違を参考にしながらその記述について検討した。③として、各教科における言語力の育成の充実を図るために「解釈の統合」や「熟考・評価」にかかわる言語活動を促す教科書の工夫について検討した。

なお、対象としたのは5教科(国語科・社会科・数学科・理科・英語科)の教科書で、東京都の公立中学校において占有率の高い3社について中

学校課程の3年間分である。

各教科の分析と考察

①について、各教科の教科書を分析した結果として、いずれの教科においてもカリキュラムに用意される言語活動は、「解釈(直接的推測)」にかかわる活動が多く、「解釈の統合」および「熟考・評価」にかかわる活動は少ないことが明らかとなった。以下、②③について各教科の分析と考察において明らかになったことについて述べる。

国語科

1, 2年生の教科書において「解釈の統合」と「熟考・評価」に関わる言語活動を促す記述数は出版社間で差がなく、3年生の教科書においては差がある傾向がみられた。3年生の教科書における「解釈の統合」と「熟考・評価」に関する具体的な記述は、複数の言語活動の形態を組み合わせることで、生徒間の相互作用を促す工夫が認められた。また、学習者と授業者とが共有する学習目標の書き込まれた教科書目次から、単元の配置においてもこのような工夫があることが認められた。

社会科

「解釈の統合」と「熟考・評価」にかかわる言語活動を促す記述は、地理分野では巻末に、歴史分野では歴史上の統治政策に関する部分や、歴史学の方法論の部分に、公民分野では社会保障・人権単元に配置されていた。

また、分野ごとの学習目標に加え、公民的資質の育成という社会科全体の目標の達成に寄与する言語活動を促す方法が、教科書の記述の中で示唆されていた。

現行の教科書の課題として、分野間の関連が十分に意識されていないという点を指摘できる。社会科は、各分野の学習によって、全体としての目標を達成できるように工夫する必要がある。そのため、公民分野では、歴史や地理の分野での学

習内容を踏まえた課題を、また、歴史や地理の分野では公民分野の学習内容をふまえて課題を設定することが望ましい。

数学科

「熟考・評価」にかかわる言語活動を促す記述のうち、学習過程の見直しを促すものは各章の最後に、発展的な内容に関する考えのまとめを促すものは巻末に配置されていた。

「熟考・評価」にかかわる言語活動を促す場合にはモデルを示すという工夫がみられた。発展的な内容に関しては学習活動の系統性や学年段階が考慮されていた。また、数学を用いた日常的な事象に関する説明を促す際には、どのような説明を促すかということによって題材を選択する必要性が示唆された。

理科

「熟考・評価」にかかわる言語活動を促す記述に関して、レポートの具体例と課題解決の整理の仕方を併せたモデルが示されている箇所は1冊の教科書で1度しか出てこない。ただし、ある会社から出版されている教科書には、「熟考・評価」にかかわる言語活動を充実させるために、教科書中の課題ごとに課題解決のモデルを提示し、子どもが主体的に課題解決過程を整理できるような工夫が施されているものがあった。

英語科

「解釈の統合」にかかわる言語活動を促す記述は単元の最後に付置されており、準備のための活動が用意され、生徒が段階を踏んで取り組めるよう工夫がなされていた。しかし、基礎から発展へ進む構成のみでなく、活用を通じた習得という観点から、記述配列の工夫を検討することも必要である。

「熟考・評価」にかかわる言語活動は、基本的な知識・技能の定着が前提とされ、少数ではあるが

学習が進んだ段階で見られた。これについては、コミュニケーションを支える文法という教科内容を扱う単元を用意し、母語の効果的な活用の観点から、「熟考・評価」にかかわる言語活動を促す記述を工夫することなどが、今後の具体的な提案として挙げられる。

総合考察

教科書記述の具体的な分析において、どの教科のカリキュラムにおいても「解釈の統合」および「熟考・評価」にかかわる言語活動は少ないこと、特定の教科内容を取り扱う単元の大きな課題、または、単元やその科目の終わりにまとめの課題として用意されていることが明らかとなった。また、各教科において言語活動の充実を促す教科書の工夫の具体を踏まえ言語活動を充実させるための具体的な提案を行った。各教科のカリキュラムの改善に示唆を与えるものとする。

本研究では、教科書中の言語活動を促す記述について、生徒が活動を実際に行う過程における認知的処理の側面から分析の枠組みを決定し考察をおこなった。実際の授業において生徒が具体的な課題を解決する姿を想定しながらカリキュラムの在り方について検討を試みた点にこれまでの教科書研究と異なる独自のものがある。

最後に、本研究の課題を述べる。本研究では、言語活動が中学校課程の教科カリキュラムにどのように用意されているのかを明らかにするため、ナショナルカリキュラムと実際の授業実践を媒介する教科書に着目した。しかし、実際の授業は、教科書の記述通りに展開するわけではなく、その過程において教科書以外の様々なリソースが学習活動に利用され、教師の即興的な対応がしばしば行われている。ゆえに、教科書に加えて、教師用指導書や授業に用いられる教科書以外のリソースについても検討を進めるとともに、実際の授業事例についての具体的な研究を積み重ねる必要がある。